
平成奇譚 『刀使師 卯月の舞』

夏月左桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成奇譚 『刀使師 卯月の舞』

【Nコード】

N2174R

【作者名】

夏月左桜

【あらすじ】

平成の世、動乱を生きた志士達と、平安の世で封印された者たちの魂と軀を巡る物語が今始まる。幕末から抜け出せない作者の第二作目です。歴史的史実は文献を参考にしておりますが、半分程になります。一作目が完結していないので、更新はゆったりである事、ご了承ください。

序節

刀工は己の心を込めて刀を打つ。

刀は使う者の心が重ねられて刀となる。

故に、刀は活きた物となりて、世を渡る。

遙か昔、神世の時代から光り物は神の手に、人の手にあり、時代を生きる者たちの心を吸い取り、活きた刀となる。

神の世から平安の世、戦国の世を渡り、幕末の世を終りに、刀を振るう者は消えたが、刀は残った。

主となつた数多の者の心を吸い、静かにその身を鞘に納めている。

京都の神社にて、一振りの刀が震えた。

波乱を感じ、刀が呼応したのかも知れぬ。

刀を見下ろしていた目が、ゆつくりと閉じられた。

「今一度、この世に舞い戻るか」

闇の中に佇む男は、哀しげに呟いた。

「時は動き出した。ならば、我も動く時が来た、と言う事であろう」

開け放たれた戸口で、月光を背にした人影がそう言った。

「本当に、行かれるおつもりで？」

「その刀が再び主を求めているのなら」

闇の中から吐息が聞こえた。

「すべてはこの国を護る為、そしてそれは、天主を護る事に他ならぬ」

「心得ております。天命に背けば、地獄の業火に焼かれる事となります。さすれば私の魂も、永遠に消える事になりまする故」

「巡れぬ魂ほど、哀れなものはない。我が軀、しかと頼んだ」
「力を欲っさんとする者より、命を駆けて御守いたしまする」

銀色に輝く満月。

回廊を進み、寺院の奥に在る小さな社の前に男は立った。

「貴方か」

社の横から男が歩み出た。

「散った花は集まり始めております」

「時は残されておらぬ。先駆けである貴方には、尽力して頂かねば
なりません」

「もとよりそのつもりで居ります」

「今此処に、波乱の風吹きたりて、導かれる者に幸あらんことを」
社の扉が開き、男は開いた闇に身を沈めた。

銀色の月が、朱色へと染まった。

「さあ、兵の宴の始まりだ」

1・始の接触

自宅の庭に設えた茶室。

釜から湯を茶器に注いだ手が止まる。

（ふむ）

茶筴を取り、茶器を手に抹茶を溶いていく。

コトンッ！

鹿脅しが落ちた。

立てた抹茶を三口半に分けて流し込むと、膝の上に両手を下ろす。

「さて。なんの理か？」

誰も居ない茶室でそう呟く。

「天の理と申し上げればよろしいか」

視線を横に流すと、白い布袴ほつこを来た男が笑っていた。まだ大人に成り切っていない面差しは、男性にも見え、女性にも見える。

「詳しい話をお聞かせ願えるかな？」

「聞きたくないと仰つても、聞いて頂かなくてはなりません」

手にしていた茶器を畳に置き、白い男の方の方へと差し出す。
器を回して一口含んだ後、男は語り出した。

時は平安時代。人ならぬモノとなり、怨の力を宿した平将門と、菅原道真の遺骨は、結界外（現世の外）より鬼妖を引き寄せてしまふ。

鬼妖は人の悪業を力とし人の血肉を貪り食う、死者にして活きるモノ。彼らは更なる力を得ようと、二公の軀に手を伸ばして来た。だが、陰陽師安倍晴明によって菅原公の魂が封印され、空也くや上人によって平公の魂が京に封印される。

「結界外とは？」

「この世の外。闇が存在する所です」

「闇はこの世にも在るが？」

「それは影です、闇ではない。闇に太陽は昇らず、月も輝かない。しかし闇の中にも影はある。人の世と違うのは、闇に影が存在する事です」

「貴方の様な力が無い私には想像すらできない。で、その闇に棲む鬼妖が、何ゆえこの世を欲しがる？」

「人が居るからに御座いましょう。鬼妖達はずっと闇の外を知らなかった。しかし、人の怨を感じ取った彼らは、闇よりも居心地の良いいこの世を知ってしまったのです」

鬼妖達が再びこの世に現れるぬよう、陰陽師達は死してなお強い思念を放つ肢体掘り起こし、頭、両手、両足、胴体に分け、これを封印しに各地へ散ったのである。

水無月の朔。みなつき フランスに菅原公の両腕を。

葉月の朔。 アメリカに平公の両腕を。

神無月の朔。かなづき インド北部アーグラに菅原公の両足を。

霜月の朔。 イギリスに平公の両足を。

師走の朔。 日本の武蔵国と平安京に両者の首と胴をそれぞれ一つずつ埋葬した。

そして鬼妖は死者の封印により、力を得る事が叶わなくなり、結界外（現世の外）へと追いやられた。

長い年月の間、人は戦いを繰り返し、憎しみや悲しみと言った負の力を溜め続けてしまった。それは結界外に追い返された鬼妖たち

にとって、結界を崩す力となる。

積み重ねられた人の悪業が、現世と闇の間の均衡を崩し、再び鬼妖をこの世に呼び寄せ、死者の封印を解いて己が時代を得るため、動き出してしまった。

「それで？ 私と貴方の関係が全くもって分からないのだが」

「貴方は、これからその手に得る物によって選ばれた。世を統べる天主を護るために」

「ふん！ それがこの世で我が魂に下された命宿か」

「仰せの通り」

「私の他にも、解る者が居る」

「はい。時はもう余り残されていません。私はこの世で成すべき事の為に、これより命を削らねばなりません。貴方は先駆けです。どうか、皆をこの地に集めて頂きたい」

「・・・桔梗紋を持つ貴方の頼み、引き受けさせて頂こう」

その言葉に白き男は頭を下げた。

「再びこの世に生を受けた私は、生を止め力を蓄えて来ました。呼ばれし者達がこの地に集うこの時の為に」

生を止める？

「生きている様に見えるが」

「はい、生きております。ただ、齢は１００年を超えてしまいました」

「どう見ても、１６か１７歳の少年にしか見えないが・・・」

「生を止めたのがその頃です」

生を止めるというのは、体の成長を止めると言う事なのだろう。

「陰陽師は皆、そのような事ができるのか？」

「さあ。他の者はどうか判りませんが」

につこりと笑った少年はまだあどけない子供だった。

「６月１６日の満月、私は力を使う為に地に降りくだります。１２月１０日の満月までに、皆を集めて頂きたい」

「日にちまで指定か」

「申し訳御座いません、月が蝕に入る夜しか地に降れぬのです」

「なぜ12月10日なのだ？」

「その日もまた、蝕の夜。今年は一年に二度月が蝕される年。故に結界が揺らぎ易いのです」

つまり、各地の封印を崩そうとしている鬼妖たちが、こちらに来易い年なのである。

「今日はここまで。あまり長く体を離れている事はできませんので」

「生身は木乃伊みいらでないと願っておこう」

男が目を閉じて開くと、そこにはもう誰の姿もなかった。

茶器を手に取ると吐息を一つ漏らし、男は覚めた茶を飲み干した。

2・要の接触

二泊三日の社員旅行が企画され、藤川夏月かづきは、新入社員4人と共にゴールデンウィークに駆け出されていた。

このご時世、社員旅行が企画される事自体稀なのに、加えて部長命令とは。

夏月達は呆れたが、ただで旅行ができるし、特別予定がない面々が選ばれたのだからと、すんなり従った。

宿は取引先が用意してくれた、京都三条に在る『加茂川館』と言う古風な旅館だった。

「わざわざ京都に泊まりに来るなんてないもんね」

「ないけどさあ、テレビがないよここ」

案内された和室に女四人。夏月は溜息を吐き出したい気分だった。女性が苦手なのだ。

いや、自分も女性なのだが、どうしてもその輪に入っていく事ができないのだ。

「結局接待になるんだよねえ」

夜の宴会は、部長が招いたその得意先のお偉いさんがやって来るらしい。

いまどき『接待』などと、旅館を使つてするほど日本経済は豊かではない。それをまだ続けている会社もどうかと思うが。

（そんな会社に入った自分もどうかと思う）

宴会に出席する以外は個人の自由行動になっていたし、美味しい料理も食べれるのだ。同僚たちはそう互いに笑い合っている。

やはり駄目だ。

夏月是我慢の限度を超え、散歩に出ると部屋を後にした。

京都の街は新旧が入り乱れる不思議な街だ。

最近では欧米よりも中国からの観光客が増え、遠目では日本人な

のか中国人なのか区別が付きにくく、話しかけられてやっと日本人じゃない事に気付く始末だった。

「古き良き都か」

確かに、一本道入ると昔ながらの町並みがまだ会ったりする。寺や神社などの観光名所も多く、なによりもここは幕末の舞台となった街の一つなのだ。歴史ブームで、歴女と呼ばれる若い女性も多くなり、寺田屋や藩邸跡をめぐるツアーも模様されていた。

夏月も幕末には少し興味があつた。流行だからとかではなく、一冊の本を手についた時から維新志士たちの思想に興味を引かれたのである。

平成という現代には、すでになくなってしまった武士の志。一つの目的のために己の命をかけて奮闘する彼らを、羨ましいと感じたのだ。

ふと足が止まった。

「？」

そして落胆ともとれる深いため息を零す。

「偶然京都に来た訳じゃないのか」

夏月は狭い青空を一度見上げると、仕方ないと加茂川館へと引き返した。

夜になって、旅館の一番大きな広間に料理が用意された。

「ねえねえ、やっぱ芸子とか出てくんのかな？」

女性たちはもうその場を楽しむ事にした様で、キョロキョロと視線を巡らしては小声で話し合っている。もちろん、夏月は参加しない。

上座に一つ膳が置かれおり、それを横にする形で左右にももずらつと膳が並んでいる。対面との間は2メートル位離れている。

三人の男性が広間に入ってくると、部長は両手を揃り合わせるようにして立ち上がり、席を進める手を出す。

長身の無表情な男が上座に座ると、後の二人はそれぞれ左右に分

かれて一番近い席に座った。

この三人が接待先か。

夏月はちらりと上座の男を見る。すると、男と視線が合ってしまった、慌てて顔を正面に戻した。

「今日は立派な宿をご用意頂き、ありがとうございます」

「ホテルなどより赴きがある旅館の方が良いと、用意させて頂いたまで。礼には及びません」

上座の男に言ったのだろうが、答えたのは左手に座る男だった。接待する側とされる側。どうも中年層が考える接待という手段に納得がいかない。

仕事を続けて貰うには、たしかに先方への根回しも大事だろう。が、ペコペコ頭を下げて、おべっかを口にしまくってご機嫌を取る事で仕事が貰えるという理屈に、社会という不思議な組織に違和感を覚える。

仕事が出来るから、任せられる。ただ、それだけでいいのではないだろうか？

まあ、そんな事は日本人に限ったことではないと、部長の音頭で食事を始めた皆と一緒に、目の前の膳へと箸を伸ばした。

至って普通の宴会だ。

部長や課長連中は三人のり相手に必死だし、女性陣もその三人がきになるらしく、いつもよりも大人し目に食事から酒へと手を出している。

確かに、精悍な顔つきの二人と、広間に入ってから一度も口を開かず笑わう事もせず座って居る上座の男は、一般に言う【いい男】だ。女性たちが視線を流しても仕方が無い。

「藤川さんは、誰がこのみ？」

横にいた女性が小声で聞いてきた。

「えっ？」

「あの三人のうち、誰がいい？」

「誰って・・・」

いや、そこ違うんじゃないか？

そもそも、こっちが誰かを気に入ったとしても、相手もこちらの誰かを気に入る訳ではない。それ以前に、そんな目的でこの場に来ているのかも判らないのだ。合コンよろしく、相手を品定めする場ではない。女性が必要なら、飲み屋街にも出かけているはずだ。

「さあ。どうでしょう」

「藤川さんに聞いてどうすんのよ」

もう一つ向こうの女性が声を上げた。

よく判っていらっしやると、夏月は膳に置かれた日本酒を口にした。

別に男性に興味がない訳ではない。恋愛だって人並みにして来たが、彼女たちのようにいい男が居るからと、はしゃぐ理由を見つけれられないのだ。

（私にはわからん）

スツと影が落ちたので、夏月は落とした視線を上げた。

（げっ・・・）

あの無愛想な上座の男が立っていた。

「？」

男は口の片方を上げて笑みを浮かべると、そのまま夏月の前に座ってしまった。

「えっと・・・この度は・・・」

「社交辞令の挨拶などいらん」

ぐっ、と出かかった言葉を飲み込む。

「おまえ、名は？」

いきなりおまえですか・・・。

「藤川夏月です」

「私は葛木恭輔。話があるから付いて来い」

返事を聞くまでもなく、恭輔は立ち上がると戸口に向かって歩いていく。

「ええ？」

横の女性の視線が痛かった。

「早くこんか」

部長に目配せすると、両手を合わせた。行ってくれと懇願しているのだ。

「はあ」

仕方なく、夏月は席を立つと廊下に出てしまった恭輔の後を追いかけた。

加茂川館には綺麗に設えた庭がある。四季折々の風情を楽しめるよう、手入れには十分気を使っているそうだ。

草履を履いて、庭の真中で立っている恭輔の背後に立つ。

「天命は下ったか？」

「……」

呼び出された理由が夏月には判った。

「その顔だと、すでに下りているか」

恭輔はさっきとうってかわって優しい笑顔を浮かべた。

「貴方もなんですか？」

「そうらしい。詳しい話を今ここでしてやれん。改めて京都へ来るといい」

そう言い、恭輔は上着の内ポケットから一枚の紙を取り夏月に差し出した。

「私邸の住所と連絡先だ。そうだな、来る日時を指定しておこう」

恭輔は6月10日にそこへ来るよう言った。

「あの」

「ん？」

「他にも居るんですか？ その天命が下りたって人は」

「居なくては困る。それらの者を集めるのが今私のすべき事なのだから」

役割があつて、動いているのだ。

「おまえの上司がどうしても接待したいと言うので、仕方なく来て

やったが、気分も乗らずどうしたものかと困っていた。丁度いい所
に、おまえが居てくれて助かった。感謝するぞ」

本当に嬉しいそうに笑う。

「それにしても、おまえも居心地が悪そうにしていたな？」
ばれている。

「苦手なんです人と関わるのが」

「特に女性は、か」

くつくくつと笑い声を上げる。

「はあ、まあ」

「では意見は一致したな」

「なんのですか？」

「あの場所に戻りたくない者が二名も居るのだ。別の部屋を用意さ
せるから、そこで宴会が終るまで隠れようではないか」

「はっ!？」

それでも茶の嗜みくらい持っている、恭輔は夏月の腕を掴んで
館内へと歩き出した。

それから部長たちが宴会をお開きにするまで、夏月は恭輔から茶
道の特訓を受ける事になってしまったのである。

3・鬼の接触

京都の空はいつになく蒼く晴れている。

「やっぱり寝坊しやがったな」

映画館の前で、緒方駿は苛々と片足を踏み鳴らしながら時計を見た。

直に慌てるでもなく、走るでもなくやって来るのは判っていた。

「くそ面白くねえ」

と言いながらも、帰る事をしない自分にも腹が立つのだが。

自問自答を繰り返していると、人ごみの中から片腕を上げて手を振る女が見えた。

沖野葵である。

「ごめーん」

ほらな。

遅刻はいつもの事だった。その度に今日こそは怒鳴ってやろうと心に決めるのだが。

「早く入ろうよ、始まっちゃう」

そしていつもそのタイミングを失うのだ。

「遅れて来たのはてめえだろうが」

「だから謝ったじゃない。心のせまーい男は捨てられるよ?」

「てめえに捨てられても、痛くも痒くもないぜ?」

ふーん、と葵は相手にはしないで映画館の扉を潜って行く。

(いつかマジでぶん殴ってやる)

と思いつつも、女に手を上げる事はできないのだけどれど。

葵が映画を観たいと言い出したのは、付き合うようになってから初めてだった。

いつも神社や寺、城めぐりがデートコースとなり、恋愛ムードもへったくれもない。お陰で一年も彼氏彼女の間柄だというのに、まだキスの一つもできてない。急な坂を登る時に手を握るくらいが関

の山、という按配なのだ。

駿が葵に出会ったのは、京都にある二条城だった。

徳川家康が築城して400年余り。本丸御殿の南西に在る堀沿い梅林に、一本の木に紅梅白梅が入り混じっている【源平咲分】と呼ばれる梅がある。

その梅の前でもじっと花を見上げている葵が居た。

駿はその立ち姿に見惚れ、考える間もなく声を掛けてしまった。

付き合って下さいとも、好きですとも言った覚えはない。だが、

梅の花を二人で見ている内、互いの連絡先を教え合い、次に会う約束をした。

考えれば不思議な事である。

（こいつのどこに俺は惚れたんだ？）

映画の内容はベタな恋愛物で、欠伸が出そうだったが、横に座る葵は真剣な眼でスクリーンを見ている。

「この主人公、最後に死ぬんだよ」

周りに聞こえないよう小さな声で、顔を近づけて来た葵が耳元で囁いた。

（クライマックスを喋ってどうする・・・）

か細い手が駿の手に重なった。

（！？）

その冷たい手は震えていた。

反対に手を握り替えし、葵の横顔を見る。

泣いているわけではないが、辛そうなその表情に駿は目を細めた。

「葵」

そつと名前を呼ぶと、葵の眼が駿を捉える様に動く。

軽くその唇にキスをする、葵は照れた笑みを浮かべて駿の肩にことりと頭を乗せた。

二時間もない映画は退屈極まりなく、ストーリーなど頭に入る事

もなかった。駿は映画自体観ていないのだから、感想を聞かれたとしても困るだけなのだ。

いつも元気で明るい葵が、今日はやけに大人しいものだから、調子も狂う。

「さて、飯でも食いに行くか？」

「駿のおごりだからね」

「へいへい」

少しは元気が出たらしい。

手を後ろで組み、軽くスキップしながら前に行く葵に苦笑を漏らす。

「何食べたい？」

くるりと体を回し、葵が笑顔で聞く。

「そうさなあ・・・」

「お蕎麦にしよう！」

なら、いちいち聞くな。

拳を握り締め、腕を絡めて来た葵にひっぱられる形で、三条から川原町通りを下り五条通へと出る。右へ曲がってさらに行くと、烏丸通の一本手前の不明門通の角に【蕎麦の実 よしむら】の暖簾が見えた。

「ここ、私のお気に入りなの」

そう言いながら暖簾を潜り、戸を開けて入って行く。

二階へと案内され、階段横の席を進められる。そこには丸く壁が開いていて、欄間（天井板と鴨居の間の空間）を見ることが出来た。

二人は十割そばの太麺を注文し、出で来た蕎麦はちゃんと手打ちで打たれていた。

「へえ。店構えから期待は薄かったが、ちゃんとした蕎麦を出すんだな」

「失礼だなあ。私がお気に入りなんだよ？ ちゃんとしてるに決まっています」

「へいへい」

ずるずると音を食るのが蕎麦の食べ方。おちよぼ口で一本一本食べていたら、蕎麦の旨味なんて味わえるわけが無い。

と、葵も周りを憚らず、ずるずると麺を口に吸い込むようにして食べて行く。

「で、なんかあったのか？」

一息ついたところで、駿は尋ねてみた。葵の様子がずっと気に掛かっていたのだ。

「ん？ なにが？」

「いやあ・・・いつものお前らしくなかったからさ」

「そう？」

「うん・・・気の回しすぎならいいんだけどよ」

「ねえ、駿」

「うん？」

「私の事、好き？」

ぶつ、と飲みかけたお茶を噴出しそうになる。

「なんでこんなムードもへったくれもないところで、そう言う事を聞くんだてめえは」

「いいじゃん、どこだって」

葵にはムードを作ろうとしても通じない事を、駿はこの時に悟った。

「そりゃあ・・・お前、なんだ」

面と向かって聞かれて、答えるだけの度胸など駿にはない。

「何があっても、側に居てくれる？」

「やっぱ、変だぞ？」

「ちゃんと答えるの」

「・・・居てやるから、安心しろ」

にこりと葵が笑う。

「約束ね」

葵の言葉が終わると同時に、背後から別の含み笑いが聞こえて来た。聞かれていたのだろう。

（くそ。蕎麦屋でする会話じゃねえだろうが）

お茶を飲み干した駿の手が止まった。

「・・・おい・・・なんの冗談だ？」

「冗談でもなんでも、ないんだけどね」

また葵が笑う。そして、後ろを指差した。

「？」

駿が振り向くと、先ほどの含み笑いを零した主が、腕を組んで口端を上げて笑っていた。

「・・・・・・・・」

「失礼した。笑うつもりはなかったのだが、つい笑ってしまった」

「誰だ、お前」

人を見下した眼。薄ら笑いに覚えがある。

「君の前に座る女性はとつくに気付いていたらしいな」

駿の顔が葵に戻る。

「てめえ・・・」

「やだなあ、怒らないでよ？ 私だって天命が下りたの、つい昨日の事なんだから」

「ふ・・・ふざけんじゃねえ！」

店内に居た客の視線が一斉に駿に向けられる。

「ちよつと、場所考えてよ」

「本当に、君は相変わらずだな。ここでは何かと迷惑を掛けるようだし、外へ出ようじゃないか」

男に促され、直ぐ葵は腰を上げて階段へと向かう。

「ちよつと待て！」

二人で下りて行くその後ろを、慌てて駆け下りて行く。

来た道を戻り、三本通りを超えた反対側に宗仙寺がある。

その境内に入った駿は、葵を傍らに男を睨みつけた。

「天命だかなんだか知らねえが、こういう茶番は好きじゃねえんだよ、俺は」

「茶番などであるものか。私も好き好んで君たちに会いたいと思っただのではない。ただ、天命が下った者を集めるのが今の私に与えられた命でな。そこを理解してくれると助かるのだが」

「じっくり訳を聞こうじゃないか」

「事を急ぐと碌な事にはならぬぞ、若造」

「わかっ・・・俺は緒方駿！ 若造呼ばわりされる覚えはねえよ」

「ほう、そうだったか？ 昔も今も、私からすれば若造で十分だ。いいか、6月1日、ここへ来い。さすればちゃんと話を聞かせてやる」

男は内ポケットから取り出した紙を差し出した。

「・・・」

それを受取ったのは葵だった。

「どうやら君はちゃんと理解する頭を持っているようだね」

男がにっこりと微笑み、葵の頬に手を添える。

「触んじゃねえ、くそが！ てめえも受取るな！」

その手を駿の手が叩く。

「含むところはお前だけではなく、私の方にもある。が、因縁などこの際捨てる。君は納得できぬ事かも知れぬが、してもらわねば困る」

駿の限界は、握られた拳を出すところまで来ている。

「ここで死闘を繰り広げるつもりはない。いずれ、その場も与えられよう。それまで我慢しておくがいい」

男は駿の拳を指差し、そう言っ歩き出した。

「話しは終っちゃいねえ！」

「私は終わった。いいか、6月10日だ。忘れるな」
追いかけようとする駿の腕を、葵の手が掴んだ。

「放せ！」

「もう！ 駄目だつてば」

「どっちの味方だ！」

んー、と考え込む葵。

「この場合は、あの人かな」

「っ！」

「約束したよね？」

へっ？ と駿の顔から憤怒の色が消える。

「何があつても側に居てくれるって、約束したよね？」

「うっ・・・」

くそっ！

こうなる事を葵は解っていたのかもしれない。

「駿・・・また、動乱が来るよ」

「・・・ちっ」

自分の意志とは関係なく、時が動き出した。

腹立たしい気持ちと一緒に、歡喜に震える心が混在している。

「理なんざ、俺の知ったことか」

避けたくても、避けて通れない道が出来てしまったと、傍らに立って寄り添う葵を抱き寄せた。

4・静動の接触

「兄貴！」

パキン！

大声を上げていきなり障子を開けて叫んだ朔月亮介は、わなわなと震える背中を見て、しまったと肩をすぼめた。

部屋へ入るときは必ず、そつと声をかけてからにしろと言われていたのを、戸を開けてから思い出したのだ。

「なぜ俺が、おまえの車の鍵番をしなくてはいけないんだ？」

上半身だけを振り返らせた兄惣太郎の手には、花のついていない茎が握られている。

「や・・・あの・・・ごめん！」

「亮介！」

手にしていた花菖蒲の首をばつさり切り落としてしまった惣太郎は、障子を開けっ放しにして逃げてしまった弟に向かって思いっきり声を上げた。

何度同じ事を言っても亮介は断りも入れず障子を開ける。その度に捕まえてはお説教を零す惣太郎なのである。

朔月家は代々京都の街で呉服屋を営んでいた。

長兄が朔月家を継ぎ、お家の事情など関係なくなった惣太郎は京都の商社に勤め、三男坊である亮介は大学に通っている。

休暇ともなると、惣太郎は生け花に時間を費やしたり図書館通いをしたりと、至って静かに過ごしている。反対に、亮介は活発がそのまま人間という形になったのではないかと思うほど、ひと時もじつとはしていない。

「車、車と、何が面白いのやら」

花器に落ちてしまった花菖蒲を拾い上げ、ほう、とため息をつく。
「午後から茶屋店にいく予定だったが」

長兄から仕立てた着物を届け欲しいと、先日になって頼まれたの

だ。なんでも、急ぎで受取りたいと買い手から連絡があつたのだと言つ。

着物を着る人など、稽古事や舞妓・芸子、茶道の家元、水商売の女たちと、限られた者が袖を通す時世となり、京都でも普段から着物を身につける人間は本当に少なくなっている。

だが、落ち着くのだ。

家柄、幼い頃から着物に触れていたからなのか、別段なんの不思議もなく仕事以外は着物を着ている。

部屋を出て、亮介が逃げた方向に足を進めて行く。

車の鍵が見つからないのであれば、今頃必死で時分の部屋を家捜しでもしていることだろう。

「亮介」

来た事を告げてから、惣太郎は襖を開けた。

「！」

「俺に付き合え」

「俺はこれから車で出かけるの！」

「その車の鍵が見当たらないから、あれだけ言ったにも関わらず大声を出し、部屋の戸を開けたんだらう？」

「うつ・・・」

「おまえも、もう二十歳はたちになるんだから、少しくらい落ち着いてみせたらどうだ？」

惣太郎と亮介は3つしか年が違わない。長兄は惣太郎よりも6つ上で、亮介とは9つ違いになる。それだから長兄は亮介に甘く、いつも手綱を取るのが惣太郎なのだ。

「仕方ねえなあ、付いていつてやるよ」

だが、亮介は五月蠅く言われながらも惣太郎に逆う事はない。

「いい心がけだ。夕刻には出るから用意しておけよ」

ぶつぶつと何か言つたようだが、惣太郎は聞こえぬふりをして襖を閉めた。

「で、なんで俺が荷物持ち!？」

何着入っているのか判らないが、分厚い風呂敷包みを背負いながら亮介は不平を零した。

「花一輪を無駄にさせた罰だ」

「はぁ!？」

「花も生きている。その花を手折って飾りつける以上、茎の一本たりとも粗末にはできないんだよ」

「だったら生け花なんかやんなきゃいいじゃないか。自生している花のが綺麗に決まってる」

惣太郎がぼかんとした表情で亮介を振り返った。

「な、なんだよ」

「たまには良い事を言うじゃないか」

「っ!」

「本当におまえの言うとおりだ」

惣太郎が亮介を褒めるのは稀である。稀なゆえに、亮介も慌ててしまった。

「さあ、急ごう。遅れでもして、先方の気分を害したらお家の面目丸つぶれだ」

烏丸五条を通り過ぎ、鴨川手前の川原町五条を左に折れた先に目的とする茶屋がある。

昔ながらの古びた家の軒先に、紫色の暖簾がさがっており、その隅に小さく葵屋と黒字で店の名前があった。

格子戸を引いて中へ入ると、畳敷きされた土間が横に設えられていた。

店内には客はおらず、ただ茶のいい香りが漂っている。

戸の開いた音を聞きつけた店主が、奥に在る戸口の暖簾を分けて顔を出した。

「ようお越しやす」

「朔月の者です」

「ああ、着物どすな」

店主はニコニコと出て来ると、畳の上にどうぞ置いてくださいと手を差し出した。

「少し待ってておくれやす」

踵を返し、出で来た戸口へと引き返して行く。

「こんな店があつたなんてなあ」

古い家はまだまだ京都には沢山あるが、この店はかなりの年代を経てゐる建物だろうと、縁に沿う木に付いている傷を亮介は手を這わせた。

心地よい木の手触りだった。

亮介の下ろした風呂敷包み引き寄せ、惣太郎は結び目を解いて行く。

「……………」

二つ目の結び目を解いたその手が止まる。

「兄貴？」

屈めていた腰を上げた惣太郎の、なんとも言えない顔が亮介を捉えた。

「ど……………どうした？」

「いや……………」

店主はまだ出て来ない。

「こんな馬鹿な事があつてはならない」

「は？」

言葉の意味するところを理解できない亮介が、大丈夫かと惣太郎の額に手をやった。

「！」

そつと手をひっこめる亮介。

「だああああ！」

「怒鳴るな！」

「怒鳴りたくもなるだろうが！」

亮介はドン！と畳に腰を下ろし、片方の足をもう片方の足へと乗せ腕を組んだ。

「何が哀しくて弟なんぞやってるんだ!？」

「私に聞いてくれるな。こんな馬鹿な事・・・結局この時代でも俺はおまえの躰をしなければならぬんじゃないか」

「躰え!？　ちよつと待て待て。俺はいつおまえに躰をされたんだ?」

「ほう。その問答をここでしたいのか？」

足音が聞こえ、二人はきつ、とそちらへ目を向けた。

「あいかわらず仲の良い事で安心したよ」

くつくつ、と笑いながら立っている男に向けられる双眸は変わらない。

「貴方もですか」

「残念ながらな。まあ、一つお茶でも飲んで落ち着きたまえ」

そう言つた男の後ろから、店主ではない別の男が茶を持って入つて来た。

男は畳の上に湯のみを置くと、軽く一礼をただけでそそくさと戸口へ消えてしまった。その男が誰であるのか、惣太郎には分かつてしまった。

「葛木恭輔、それが今の私の名だ」

奥に消えた男に視線を向けたままの惣太郎に恭輔は名を告げた。

「私は朔月惣太郎、こっちは弟の亮介」

「こつちつてなんだ、こつちつて・・・」

目で制され、亮介は押し黙る。

「それで、なんの因果で私はまた貴方の前に立つ羽目になっているのかな？」

「因果などではない。天の理によつてだ」

惣太郎は出された湯のみを口に運んだ。

「飲むか、普通？」

「気を静めるには丁度いい。おまえと違って私の神経は繊細なんだ」

「ム力つく野郎だな!」

「兄に向かつて野郎などと。後でじっくり説教させて頂く」

「こんな時に兄弟関係なんぞ出すな！」

「……申し訳ないが、私も忙しい身でね。喧嘩は帰ってからしてくれまいか？」

恭輔は二人の前に椅子を持って来ると腰を落着け、一息ついた。最初に天命が下ったのは自分で、安倍晴明を名乗る少年により、同じく天命を受けた者たちを集めるよう動くことになったと語る。

「詳しい話は皆が集ったらするつもりでいる。それまで待つてもらいたい」

「訳の分からん事を言つてないで、ちゃんと説明したらどうだ？」
解つてないのはおまえだけだと惣太郎が肩を落とす。

「小難しい事なんぞ、俺にはわからん！」

「そう言うと思ったよ」

「君が一緒に良かった。その小僧にどう説明すればいいか、二人きりだったら根を上げているところだ」

やれやれと恭輔は自分の肩を揉む。

「すでに三名との接触が済んでいる。あと何名の所へ私が出向くのかはまだ不明だが、6月16日までには全ての者を集めなくてはならん」

なぜなのだと惣太郎が問う。

「蝕（月食）の夜までに集めよとの、安倍晴明殿の仰せだ」

「色々ややこしい事情の様だ。で、私たちもその日に君の所へ集まればいいのか？」

「いや。6月10日にここへ来てくれまいか。16日当日では説明するにも時間を急ぎ^せすぎるのでな。事前に話しをしてしまいたい」
差し出された紙を受取る。

「承知した。亮介もいいね？」

「ふん！ いつもおまえが決めるんだろうが」

なぜ兄弟なんだと、亮介はしきりにぶつぶつ言っている。

「魂は皆一つしか持たぬ。同じ魂を巡らせ、違ふ心で時を渡る。だが、近い魂はいつも傍に寄り添うものだ。何度生まれ変わろうとも、

それだけは絶対に変わることのない普遍の事象なのだ」

「天とやらも、粋な計らいをしてくれるじゃないか」

亮介はそっぽを向いたまま、そう呟いた。

「くつくくつ。本当に君は素直ではないな。嬉しい時は言葉で伝える方が良い。魂が通じていると言っても、言葉にしなくては思いなんぞ届くものではない」

うるせえ、と亮介が顔を背ける。照れているのは惣太郎にも恭輔にもばれているのだが。

「ともあれ、それまで何もしないと言うのは私の性に合わない。この着物を頼んだ主は貴方だと思うが」

「いかにも」

「ならば、茶にでも招待させて頂こう」

「いい茶室がある。私から招きを出そう」

亮介を横に、二人はさつさと予定を決めてしまった。

「俺にはどうしても、狐と狸が語り合っているようにしか見えん」
その頭に、惣太郎の拳骨けんこつが落ちたのは、言うまでもない。

5・志の接触

蝉が鳴き出すのはいつだろうと、まだ夏にもなっていない空を見上げ、楠本達也はぼんやりとそんなことを思った。

達也の家には近代的と思える物が少ない。

テレビもなければ、時計すら壁に掛けられておらず、窓際の小さな机に置かれているノートパソコンがこの部屋では唯一「機械」だ。携帯電話はさすがに持っている。友人たちとの連絡には欠かせない物なのだが、最初は購入するのをかなり渋った。メールでいいじゃないか、とも思ったが、緊急の際に家に電話がないのは不便極まると言われ、仕方なく買ったのだ。が、電話とメール以外使いこなせてはいない。

「達也、いるかー？」

五月蠅い。

物思いに耽^{ふけ}っている時や、本を読んでいる時を邪魔されるのが一番気に障るのが達也なのだ。

どこどかと大きな音を立て、廊下を歩いて来る侵入者にため息を漏らす。

「おう、居た居た」

顔を覗かせたのは、中学から腐れ縁となっている東本真人^{とうもと}だ。

「朝っぱらなんなんだ、騒々しい」

「そう怒るなつて。切符、取れたぞ」

「切符？」

真人はズボンのポケットから出した紙を目の前で広げて見せる。

「週末、一泊だ」

「は？」

「あれ？ 忘れた？」

何の事だったかと、記憶の底にを浚^{ひた}つてみる。

「なにか約束してたか？」

「しつかり忘れてるな」

真人に切符を渡され、そこに書かれている駅名に視線を落とす。

「京都？」

はて、いつそんな約束をこの男としたのだろう。

「あーあ。達也の頭ん中にはなーんも詰まってるない」

「失礼な！」

清水寺を訪れたいと、そういえば言った事がある。

「まさか、それを覚えていたのか？」

「俺も行きたい！　なら一緒に行けばいい。ほら、宿も取った」

嬉しそうに笑顔を浮かべながら宿のパンフレットを、これまたズボンのポケットから取り出して広げた。

「人に相談もなく勝手に決めて」

「お前に任せてたら年越しちまう」

「何が哀しくて男二人で京都の街を散策しなくちゃいけないんだ」

「あほ！　京都には別嬪^{べっぴん}さんが居るだろうが！」

疲れる男だが、悪気がある訳ではない。ただ率直に物事を考えて行動するのが真人なのだ。

「ナンパなんか、俺はしないからな」

ぶうつと頬を膨らませる。

「・・・それが第一の目的だな」

こうして達也は、半ば強引に組まれた旅行で京都を訪れる事になってしまったのである。

初夏と言えど、晴れていれば日中は暑く、日が落ちれば肌寒くなる。

JR京都駅から東福寺を経て清水五条で降りた二人は、徒歩片道23分の道を歩いていた。

もつそりとした足取りで後ろを着いてくる真人は、駅を出るなり暑い暑いと繰り返している。

「高知とはえらく違うな」

「暑い時は何処だろうと暑いに決まっている」

だが湿度が違う。じとつとした空気が体に纏わりつき、風も少ないため余計に温度が高く感じられるのだ。

「大体、お前が京都へ来ると言っただろう？ 早く歩け」

ぶつと口を尖らせ、暑さを感じないお前は人間じゃないと愚痴を零す。

「ちよつと、休もう、な？」

何度そう頼んでも、達也は一向に聞き入れない。ペットボトルで十分だと、さつきも自販機から水を買って渡される始末だった。

「急ぐ旅ほど面白くないものはない！」

「べつに急いでるつもりはない。清水寺はもうそこだろう？ ほら、仁王門も目の前だ」

ゴールデンウィークを過ぎても、京都から人の数はそう減らない。秋ともなれば紅葉を目当てにさらに人が増え、観光名所になっている歴史要所などで情調を感取できようはずもない。

五条坂から産寧坂へ入ると、それまで騒がしかった真人の口が静かになった。辺りをきよきよと見回しながら、着いてくる姿にどうしたのかと問う。

「いや・・・なんでもない。なんでもないき」

産寧坂を登る先に、仁王門が頭上に聳^{そび}えていた。入母屋造りの檜皮葺に丹塗り（丹や朱で塗る）された室町様式の楼門ゆえ、【赤門】の別名でも呼ばれている。

階段手前には狛犬が対を成して置かれている。【阿・阿の狛犬】と呼ばれるこの狛犬は、面白いことに、なぜか両方とも口をあんとりと開けていた。普通は向かって右側の狛犬は開口しており左側の狛犬は閉口しているのだが、なぜ二つとも口を開けているのは判っていない。

「腹が減ってるんだ」

歴史物に何かしらの意味を見出す、という事が真人には苦手なのだろう。達也もそれを知っていたので、あえて突っ込まなかった。

平安京遷都よりも前から存在している清水寺は音羽山（山号）に建てられ、西国三十三箇所観音霊場の第16番札所ともなっている北法相宗大本山だ。

江戸時代初期寛永10年（西暦1633年）に再建された奥之院には、秘仏の【十一面千手千眼観世音菩薩】坐像があり、33年に1度しか開帳（開扉）されない。

この千手観音には脇侍として、毘沙門天像と地藏菩薩像が安置されている。地藏菩薩像にいたっては、鎧を身に纏い、手には剣をもつ武装した姿に、袈裟を着るという一風変わった像である。

「どこへ行くんだ？ 本堂はこつちだぞ？」

仁王門の右手を登れば三重塔もあり、清水の舞台へも行けるのだが、真人は左手へとその足を進めた。

「成就院へ行く」

「？」

「いいから着いて来い」

成就院は、応仁の乱のによって焼失した清水寺を再興した、願阿上人の住房として造られた。現存する建物は寛永16年（西暦1639年）に後水尾天皇の中宮、東福門院和子により再建されている。また幕末には忍向月照（京都清水寺住職）、信海両上人の許に近衛忠熙公や西郷隆盛などの志士たちが集って密談を交わした場所でもある。

「おい、真人」

すたすたと前に出て歩き出した男の背中を追う。

「来たか」

いつの間にか入口に立っていた男がそう言葉を発すると、真人は、お久しぶりです、と深く頭を下げた。

「ついて来い」

知り合いと待ち合わせなど、達也は聞いていなかった。

庭が見渡せる部屋へ入ると、先ほどの男が静かに庭に向かって座

っていた。

この庭は京都の三つの成就院、雪月花の庭園の内の【月の庭】である。借景式・池泉観賞式の庭園には、豊臣秀吉が寄進した誰が袖たがそでち手水鉢が縁先ようすはちにあり、烏帽子石えぼしいしといった奇石、西端の蜻蛉灯籠かげろうとうろうや東端の手毬灯籠てまりとうろうなどの石灯籠が配置されている。

「失礼します」

真人が行儀よく座ったので、仕方なく達也もその横に膝をついて座った。

「遠路、ご苦労だったな」

「ご用命とあらば、いつ何処からなりと馳せ散じる所存にございませす」

達也は狛犬のごとく口を開けて隣の友を見る。

「君が大人しく私の意見を聞かぬ事は承知しているから、そう畏まかしこらないでくれ」

「なら、遠慮なく」

真人は正座を崩し胡坐をかく。

「やれやれ。素直と言おうかなんと言おうか」

男の眼が達也を捕らえた。

「君はまだか？」

「は？」

その一言で十分だったらしく、男はそれ以上達也に問いかけることはしなかった。

「なに、すぐに解ります。で、今回の用件は？」

「急ぐな。面どくさい故、他の者にも日時を指定し集まれと言っている。高知から来た君たちには申し訳ないがな」

「それなら、逗留させて頂く。京都へ入ってから、なんとも嫌な空気にそわそわと心が騒がしくていかん」

「ほう・・・下ったのは刀もか」

「はい。高知を発つ前日に」

男は小さく笑った。

「他の者には命が下っただけなのに、さすが、と言わせてもらおう」
「・・・真人、説明しろ」

「たまらず達也はそう言った。」

「説明もなんも、こればかりはなあ」

「要領を得ない返答に、達也の気が立つ。」

「京都へ来たのは観光だろう！　こんな所へつれて来て説明もなしとは、どういふつもりなんだ？」

「ここは月照上人の住坊、こんな所呼ばわりをするでない」

「月照上人？　西郷隆盛と昵懇じっこんだったという？」

「月照は京都から鹿児島へ逃げ、薩摩藩の庇護も受けられぬまま、幕府の追っ手から逃れられないと悟った西郷隆盛と共に、入水自殺を図るほど縁の深い人物だ。ただ、西郷は死に切れず、月照だけがそのまま還らぬ人となったのだが。」

「多少は歴史を紐解いているか」

「どうやらこの男は自分の事を知っているらしい。恐らく真人が話しをしたのだろうが、反対にこの男の事を真人からは聞いていない。」

「公開期間は終わっているから、逗留するならば使つといい」

「事もなげに文化財に泊まれと言う。」

「許可は取つてある故、心配するな」

「達也の心配を他所に、それならそうさせてもらつと真人はここに泊まる事を決めてしまった。」

「貴方は誰なんだ？」

「ああ、これは失敬。私は葛木恭輔。君たちとは懇意こんいの間柄だった、とだけ言っておこう」

「懇意！？」

「しかも過去形である。」

「ちゃんと説明しろ！」

「怒鳴った相手は真人だ。その胸倉を掴み上げ、鼻先まで顔を近づける。」

「そう怒るな、ほんに短気でいかん」

「誰がそうさせていると思っっている！」

拳を握り、今にも真人を殴らんばかりに腕を振り上げた達也の手が止まった。

「な・・・」

「良かったな、殴られる前で」

恭輔がそう投げると、真人は確かにと返す。

「どういう冗談で？」

「君たちがそう思うのも無理はない。が、事實は曲げられん」

「お前はとくに気付いていた、そう言うことか」

「すまん。説明しても絶対に信用なんかしなかっただろ？」

確かに。高知で小説じみた絵空事を聞いたとしても、きつと笑い飛ばしていた。

「では、皆が集まるまでここで待て。あと半月もすれば主だった者たちが来る手はずとなっている」

皆とは？

聞いたが、恭輔は楽しみは取っておくものと言い、支度をさせて来るからと部屋を出て行ってしまった。

「産寧坂で静かになったのは、そのせいか」

明保野亭という常宿の一つが在ったと、達也は思い出した。

池田屋事件の残党狩りで、長州藩士が東山にある明保野亭に潜伏していると、会津藩と新撰組が捕縛に乗り込んだ。だが会津藩士柴司が傷を負わせたのは長州藩士ではなく、土佐藩士麻田時太郎だと判り捕縛には至らなかった。

事はそれで収まらず、最初に捕吏ほり（罪人をめしとる役人）に名を明かさなかった責任も有ると、藩主山内容堂やまうちようどうは麻田を切腹させてしまった。

しかしこの処分は片手落ち（不公平）だと、土佐勤王党など倒幕を掲げる勢力が激昂し、会津との間に水を差しかねない事態に発展する。柴司は自らの職務を遂行したただけなのだが、両藩の関係を悪化させないため、切腹という形で謝罪を示したことにより、明保野

亭の事態は收拾をみる事となった。

「誰が悪い訳じゃない。そういう時代だったんだ」

「今も対して変わらない世の中だがな」

それは真人も思っている。国の形が変わっても中身は維新以前となんら変わりはない。幕府の代わりに【国会】が政治を動かし、朝廷は皇居にて政から追いやられている。

「民に至っては更に酷くなっている。不平不満を並べ立てるばかりで、自ら動こうとはしない」

「変わってなんかないさ、昔も今も、他力本願なのは一緒だ。誰かがなんとかしてくれるだろう、そういう日和見的な生き方をしてるだけだ」

「まずは、そこからだったんだろうな」

真人は立ち上がると縁側へと歩いて行く。

「ここは座って庭を見るのがいいらしい」

「低い所からは全体を見渡す事はできない」

どかつと、また胡坐をかいて座り、片肘を膝の上に乗せると頬づえをついて庭を眺める。

「だが、高い目線では見えないものもある。お前は高い所から世を見て、俺は低い所から世を見渡した。それは変えなくてもいいだろう？」

「まったく。それで失敗したんだろうが」

けたけたと笑った真人は、それでも俺は俺の考えるようにすると、暮れ行く空を見上げた。

6・荒の接触

「何をするにしても、まず予定を立てるのは大事だろ？」

旅行の計画を立て始めたのはいいが、意見を一致させるまでにいつも時間がかかってしまう。

「目ばしいところだけチェックして、とりあえず行ってから他に見たい所があったら行く、これしかない！」

桜井京子は落ち着きがない。とは言っても動作ではなく「思い立ったが吉日」のごとく、何かしようと決めたら直ぐにしないと気がすまない性格なのだ。

「それやって、行きたいとこ全部回れたためしがないだろうが」

反対に、梅山泰助は「待てば甘露の日和あり」と、あせらずじつくりと構える性質なもので、二人は事有ることに衝突する羽目になる。

「だから、予定は予定なのです」

そんな事を言われたら、時間を考えて予定を立てた貝がないじゃないか。

「好きにしろ」

結局は折れる事になるのだが、あっさり同意しては自分の気分が収まらない。

「じゃあさ、ここは絶対外せない、ってとこだけは必ず行こうよ」

京子も我儘を言うばかりではなく、ちゃんと泰助の事を考えている。なので、いつの間にか険悪な雰囲気はなくなってしまうのだ。

「楽しみだなあ」

本当に嬉しそうな顔をして、目の前に広げたパンフレットを覗き込む。

「雨日和にならなきゃいいけどな」

二週間後の週末、6月3日の金曜日の夜。

姫路から京都へやって来た二人は、宿となる加茂川館へとやって来た。

空は朝から生憎の雨模様になってしまっている。

「泰助が雨日和、なんて言うから雨になるんじゃない」

「俺のせいかな!?」

雨の音が部屋を満たし、他に聞こえてくる音はない。

喧騒と人ごみの羅会から隔絶されて、別次元の空間に身を置いている、そんな気分させる瞬間だった。

泊り客が少ないのか、宿はいたって静かだった。

食事も部屋へ運んでもらったので、二人で静かな夕食になった。

「絶対に外せない場所は？」

「んー、寺田屋」

「うわ、凄く当たり前すぎ」

「お前は？」

「んと・・・寺田屋・・・」

「殴ってやろうか？」

箸を握り締め、本当に殴りそうな泰助に暴力反対を訴える。

「明日、晴れるといいね」

京子の願いも空しく、翌日もどんよりとした曇り空から雨が降っていた。

「・・・雨 فقط、出かけようか？」

「ん・・・そうだな」

せつかく京都まで来たのだから、雨だと引きこもっていてもつたいたい。

「どうする？ 寺田屋へ行く？ 後に回す？」

「だから予定立てたとおりに行けばいいだろう」

「雨なんだもん」

理由になっっていないと思いつつ、これも旅の一つと諦めるしかない。

加茂川館を出た二人はまず長州の藩邸跡へ行くことにし、それか

ら御所へ足を向けた。

「閉まつてるねえ」

残念なことに、京都御所春季の一般公開は4月6日から10日までの5日間だった。

公開されていたのは御所の正殿紫宸殿ししんでんと、西側在り東を正面とする清涼殿せいりようでんだ。

紫宸殿南庭には左に桜、右に橘の木が植えられており、それぞれ左近衛と右近衛が配陣したため左近の桜、右近の橘とも呼ばれる。

「見たかったなあ、右近左近」

「たかが木じゃないか」

「木にもいろいろあるんです」

そんなもんか？ と泰助は興味をそれ以上示さず、とことこと歩き出した。

「風流のないやつ」

拝観できないとあれば、何時まで散策していても仕方ない。泰助はそのまま二条城へ行くかと振り返った。

「・・・・・・」

後ろを付いて来ているものとばかり思っていたのに、京子は知らない男と立ち話をしていた。

「あの野郎」

急いで戻ると、少し青ざめた顔色になっている京子が泰助を見上げた。

「この状況・・・」

「あ？」

片手で顔を多い、もう片方の手で脇を抱える京子。

「こいつは俺の連れだ、ナンパなんかするな」

「ナンパ？ 私が？」

はっ、と息を吐いて男は高らかに笑い始める。

「そうか、そうか」

泰助は、可笑しいと言わんばかりに笑い続ける男の胸倉を掴み上

げた。

「泰助、だめだめ！」

京子が慌てて泰助の腕を掴むが、強く握り締めた手を振り解くことはできない。

「血気に逸るところは変わらぬか。説明してやるから、まずこの手を放んか」

男はいたって冷静である。罵声の一つでも返ってくれば殴れるのだが、歯噛みしたまま泰助はゆっくりと指を開いた。

「聞き分けが良くて助かる」

着物の襟を正し、やれやれと京子に向き直る。

「彼女を口説いていたのではなく、少し用があつたから声をかけたまで。そうだな？」

「はあ、まあ」

「話して！？」

「落ち着いて、泰助。んと、どう説明したらいいのやら、さっぱりなんです」

ちらりと男を見る。

「縁あつたこの者とは旧知の仲でな。言つたが、伝える用があり足止めた。いずれお前にも判ることだが、今詳しく話したところで理解などできまい、と思うが？」

最後は京子に尋ねたのだろう。

「そうですね。取り合えず、日時は覚えておきますので、葛木さんはもう行つて下さい」

「そう願おうか。このままではいずれ殴られそうだから」

そう言つと、恭輔はではまた、と泰助には目もくれず歩き出してしまった。

「待てよ！」

「駄目だってば！」

片手を上げて、振り向きもせず歩いていく背中から、腕を掴んだままの京子に目を戻す。

「説明しろ！」

「だからするつてば。つて、どう説明したらいいんだか・・・あゝ、もう！　なんで私だけな訳！？」

京子は泣き出しやろうかと考えたが、それで収まりのつく男ではない。

場所を変えようと、とぼと歩き出した京子の後を、ビシャビシャと地面を鳴らしながら付いて行く。

「跳ねるからやめてくんないかな、それ」

足元を見ると靴もズボン裾も濡れていた。

「ほつとけば乾く」

はあゝ、と長いため息を吐く。

「ほんと、なんで私だけ？」

自問自答しても始まらなかった。

「泰助」

「なんだ！」

「怒鳴らなくても聞こえます」

ちっ、と舌打ちが聞こえた。

「さて問題です」

「はああ？」

「なぜ寺田屋に二人とも行きたかったのでしょうか」

「はっ？」

突然そんな事を聞かれても、こうだと言う理由がある訳ではない。

「京都には沢山観光名所があります。それなのに、なぜ寺田屋は外せないのでしょうか」

「そんなの・・・」

「長州藩邸跡にしても、御所にしても、二条城にしてもです。京都には清水もあれば嵐山もあります。京都タワーだって名物でしょう。なのに、なぜ？」

泰助は真剣に考え込んでしまった。

これで時間が稼げると思った。その間にどう説明するか考えなく

てはいけないのだが。

「あれだ、ほら。京都と言えばだ」

「言えば？」

「んと、ほら・・・幕末！」

「・・・・・・」

疑うような眼差しを向けられ、泰助は視線を逸らした。

いつの間にか雨が止んでいた。雲が薄くなり、間から少しだが青空も覗き始めている。

「晴れるよ、空」

見上げた空には、何かを急ぐかのように雲が流れて行く。

「話しそらすなよ」

ぎくりと肩をすばめる。後回しにしたところで、一度気になった事を忘れてくれない性質と知っているから、本当に困るしかない。

「葛木って誰なんだ？」

「知ったら、多分青ざめる羽目になるよ」

「自分もそうだったのだ。」

「ちゃっちゃと話せよ」

そうしたいのは山々なんです。

もう半泣きになりながら、恭輔を引きとめれば良かったと後悔する。きつと自分より上手くこの男に話しができたはずなのだ。

（多分、めんどくさくて逃げたよね、あれ）

そうとしか思えなかった。

「京子！」

「はいはい・・・あのさ、輪廻転生って、信じる？」

「は？ 輪廻？」

「そうそう。巡るやつ」

まったく話しの中身が見えず、さらに泰助の顔が赤く染まった。
「いい加減にしろ！！」

そう叫びながら京子の肩を掴んだ泰助が、次の瞬間声もなく固まった。

「・・・泰助？」

もう、その顔に怒りの色はなくなってしまうている。
京子は安堵する。

「怒鳴らないでよ、私に」

「・・・おい・・・」

「はい」

「俺は夢を見ている」

「そう・・・ですか」

「きつとこれは夢だ。な？ そうだよな？」

京子の手が泰助の顔に張り付く。

「？」

その指が泰助の頬を思い切り抓んだ。

「いつてえよ！！」

手を払いのけ、抓まれた頬を摩る。

「はい、残念。夢じゃありませんでしたね」

くそっ！　　と空を殴るように手を下ろす。

「お前が・・・あゝくそっ！」

「くそくそっで、汚いなあ」

「おい、待て。さっきのは・・・まさか・・・」

「よく出来ました」

怒りで赤くなっていた顔が一転、血の気が引いて青くなり、泰助はその場に頭を抱えて座り込んでしまった。

「まあ、ほら。知らなかった訳だし、仕方ない、と言う事で」

「それで済む相手か？」

「今は、済むんじゃない？」

二条城へ向かう間に、恭輔から告げられた内容を泰助に話して聞かせた。

それぞれが異なる場所で恭輔と会い、天命の下った者たちが長い時を経て京の都へ集う日は、すぐにやって来た。

1・事の始まり

平成23年6月10日。

恭輔の指示によって集まるように言われた者たちが、初夏の京都へと集った。

「来ぬのではないかと心配していたが」

最初に清水寺へとやって来たのは駿と葵の二人だった。

「駄々を捏ねるのを、無理やり引っ張って来たんです」

「誰が駄々を捏ねた！」

「あれが駄々じゃないならなんなのよ」

胡坐を組んで立ち上がるうとしない駿の腕を掴み、ずるずると引き摺りながら廊下へ出たのだが、駿は廊下で寝転がってしまい、手足をバタつかせて葵の強行を阻止しようとしたのだ。

「大人かと思えば、なんだそれは」

醜態をばらされた駿の顔は、それでもかと言う程、真っ赤に染まっている。

「かつて、新撰組において【鬼の副長】と呼ばれた男の名が泣くではないか」

「関係ねえだろう！」

「確かに。そう言われればその通りだ。が、魂は同じと心得よ」
だが駿にはそんなものは通じない。

「ここではないんだ、中へ入ったまえ」

清水寺は、京では有数の観光場所である。

人通りの多い表向きの場所で話しは出来ないと、恭輔は二人を奥へと案内した。

「一般には知られて居ない奥本堂だ。関係者である人間も、ここを知る者は少ない」

事が起きた時に使えるよう、代々内密にされて来たと説明する。
駿と葵が部屋へ通された少し後、二人の男が姿を見せた。

「君たちも中へ」

そう言われて入って来たのは、朔月兄弟である。

「よもや、君たちと席を共にする日が来るとは思ってもみなかったよ」

爽やかな笑みを浮かべた惣太郎が、対面に座る二人を見て言った。

「俺もだ」

亮介も不機嫌極まりない表情で駿を見ている。

「やれやれ。これでは先が思いやられる」

恭輔は一人にこやかに座る葵に笑いを向けた。

「てめえ・・・」

足音と一緒に言い合う声が近づいて来る。

「空気を読めん奴らだ」

次に現われたのは、寝坊の原因を追究している達也と、必死に言い訳をしている真人だった。

「起こせと言って起きなかったのはお前だろうに！」

「起こし方が悪い！」

部屋へ一步入った二人の視線が、じっと自分達を見上げている視線にぶつかる。

「これは、失礼した」

直ちに姿勢を直したのは達也の方だった。

「誰が来たか解り易くて助かるが、もう少し静かに来る事は出来なかったのか？」

「こいつに言つて下さい」

「俺のせいにするか!？」

駿と惣太郎が火花を散らしていた事など知る由もなく、二人は畳に座ったがまだ言い合いを続けている。

「いい加減にせんか！」

恭輔に一喝されて、達也と真人はようやくその口を閉じた。

「相変わらずと言おうか、何と言おうか」

「失礼しました」

二人は同時に頭を下げた。

「空気を読めない事、今は助かったと言ってこう」
ちらりと駿を見流す。

「遅くなりました」

夏月は達也たちの後ろからやって来ていたのだが、出るタイミングを損ね、場が落ち着いたのを確認してからそう声を掛けたのだ。
「大丈夫、まだ皆が揃った訳ではない」

何処に座ろうかと躊躇ったのがわかったのか、恭輔がここへと、自分の左手前を差した。

「失礼します」

駿の横に座り、藤川夏月ですとお辞儀をする。

口を開きかけた葵は、また慌しい足音がしてその口を閉じた。

「ほんとうに騒がしい奴が多い」

滑り込む様に部屋へ入って来たのは京子と泰助である。

「間に合いました!？」

そう叫びに近い声を上げた後、そこに集まる面々を見て一瞬で姿勢を正した。その横に泰助も座る。

「なぜこうも賑やかな連中が集ったのか、私は天に問いたい気分だ」
だが、そう言う顔はどことなく嬉しそうではある。

「さて。一応これまでに私が招いた者たちは全て集まった。これで終りではないと思うのだが、今はまだ報せが下りてはおらぬゆえ、残りの者には後でまた説明するでしょう」

「一つお訪ねしたい」

惣太郎が恭輔の言葉の間に入った。

「天命が下りた者の縁は、この場に居る者を見る限り解りますが、何故彼らまで居るのですか？」

「なにが言いたい？」

結局そこへ戻るのかと、恭輔は苦笑する。

「あの時代の続きをさせる為に、天命が下りたのではないと、まず言うておく」

「それはそうでしょう」

「ならば古き縁を今は置かれよ。大事はそれではない。これから起こる事に大事がある」

「・・・解りました」

助かる、と言だけ言うと、恭輔は立ち上がり、後ろの襖を開いた。

白いモノがそこに在った。

「お初に御目にかかります」

小さな少年だった。まだ16か17歳くらいだろうか。

「本来ならば16日までに全ての者を引き合わせたかったのだが、これも理であろう」

「左様にございます」

今にも消え入ってしまいそうなほど、少年の存在が希薄に感じられる。

「一つ一つ、話をさせて頂きたいと存じます。しかし、今の私にはそう長く語る時間が在りませぬゆえ、理の始めをまずはお話させて頂こうと思います」

そして少年は、静かに平安の都で起きた事を語り始めた。

平安京は延暦^{えんりやく}13年（西暦794年）、飢饉や疫病の流行などの災難や、身内の不幸が相次ぎ、桓武天皇により長岡京から移された。

延喜元年^{えんぎ}（西暦901年）。

出世の^{（すがわらのみちまさ}一途を辿っていた菅原道真は、^{ときよしんのう}齊世親王を皇位に就け醍醐^{ごだい}天皇から篡奪^{さんだつ}を謀ったとして、大宰府での生活を余儀なくされるが、その3年後、この世を去ることに成る。

「東風吹かば^{こち} 匂ひをせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ」

京を発つて大宰府へと向かう折、道真が謳った有名な句である。朝廷への権力集中を嫌った藤原氏の陰謀により、平安京から追わ

れる事となつた道真は、国の安泰を憂いつつ、いつか自分の罪が晴れる日が来る事を祈願していたが、享年59歳、生まれた日と同じ2月25日に失意のまま息を引き取った。

大宰府の北東にある三笠郡へと道真の御遺体を運んでいた牛車が、突然安楽寺の前で動かなくなる。

推しても引いても牛車はぴくりとも動かない。

困った道真の弟子味酒安行は、その近くに遺体を埋葬し、祠を建て祭った。

この頃から、藤原家に厄災が起こり出す。

陰謀に関わった中納言藤原定国が急死した事が発端となった。

道真を安京から追う陰謀を巡らせた張本人である藤原時平の両耳より、蛇に化けた道真が現れ、祈祷も空しく時平は狂死してしまう。集団職務放棄をした中心人物、源光は、狩りの途中、乗っていた馬ごと底なし沼に落ち行方不明となるなど、不可解な死が多発したのである。

道真が、恨みを晴らすために御霊となり舞い戻ったと噂が流れた。死人を出してもなお、御霊の力は緩まるどころか、さらに増して行った。

醍醐天皇の皇子保明親王が21歳で薨去。後、皇太子となつた慶頼王（保明親王の子）はわずか5歳でこの世を去った。

「これだけにございません。道真公の御霊はその力を保つたまま数多の災いを起こしてしまつたのです」

布袴を纏つた少年は、陽の落ちた本堂から外の景色へと視線を投げた。

「さぞ無念であつた事でしょう」

当時の朝廷は、道真の御霊を鎮めようと、左遷するという詔（天子の命令）に関する全ての書を焼いたが、その火が建物へと燃え移り、その場に居た僧侶たちを焼き殺してしまつた。

「京を襲つた干ばつ対策にと、会議を開いていた時でございました。会議の場となつた清涼殿には、貴族や役人達が集まっていたのです。」

その会議中に突如雷鳴が響き渡り、大納言藤原清貫ふじわらのきよつらや貴族、女官達に雷が落ちたのでございます」

少年は細い目をさらに細めると、その場に座る者たちへと視線を巡らせた。

「体調を崩されてしまった醍醐天皇はこの事件をきっかけに、皇位を8歳になった寛明親王ひろあきらしんのうへと譲り、寛明様は朱雀天皇すざくてんのうとして即位されたのです」

「道真殿の御霊は、それで落ち着いたか」

恭輔が静かに言った。

「いえ。念が深かったためか、道真様の御霊はなかなか鎮まっては頂けませんでした」

悲哀を帯びた顔が悲しげに笑みを浮かべる。

「そう、鎮めなければなりませんでした」

悪行を連ねてきた訳ではなく、国の安泰をと帆走した身で京を追われ、失意と共にこの世を去った無念は、その場に居る者達にも解る事ができた。

「私は都を護る立場にありましたゆえ、安らかに眠っていたたく様に力を尽くしましたが叶わず、御霊を封印せざるを得なかったのです」

鬼妖の出現が、都で囁かれるようになったからだと言った。

「その頃はまだ数も少なかったのでございます」

遠い目で宙を見上げる。

「さらに都は世俗混乱を極めました。朱雀天皇が在位中、平将門公たいらのまさかどと藤原純友ふじわらのすみともが乱を起こしてしまったのです」

人の業は鬼妖の糧となる。

恐怖と憎しみや強欲が、結界外とこの世の境をあやふやなものに始めてしまう。

「このままではいずれ、都中に鬼妖が蔓延はびこり、人の世は人ならぬモノの手に堕ちてしまう。私は杞憂に暮れました。陰陽師であるとはいえど、その力には限りがありますから」

白い顔が闇でさらに白さを増した。

「お疲れの様子。一度時間を置かれるがいい」

恭輔は座するその姿に向かって言うと、返答を聞く間も与えず、後ろに居た僧へと少年を託した。

2・陰陽師と志士

鬼や怨念、あやしなど、白い幼子が語った言葉は小説によく書かれる妖怪物とたいして代わりなかった。それがここ居る誰もが抱いた感想なのは、何を言うでもなく座る顔を見回せば判る事だった。「それで、俺達に何をしろと言っただ？」

沈黙に耐えかねた亮介が、不機嫌顔で恭輔を見上げる。

「話しはまだ終っておらん。最後まで聞けばおのずと判る」

「その話し手は、真っ白い顔で奥へ消えたじゃないか」

顔を合わせもせず、襖の向こうを気にしている恭輔に殴りかりそうな様子で、亮介がイライラした感情を放ちながら片足を立てた。

「俺達に何をさせたいのか、まずそれを説明しろ。続きはそれから聞いてやる」

「我慢、忍耐。これほど君に似合わぬ言葉はないな」

ふふん、と嘲弄する恭輔に、その言葉通り我慢しきれないのが亮介の短所である。

「いいか。今は平成の世、身分もへつたくれもない。だから俺はあんたに遠慮なんかしない」

「誰もへつらえとは言っていない。私の態度が気に入らなくとも」
細められた眼に、亮介はごくりと喉を鳴らした。

「性分だから仕方あるまい」

「だああああ！ その喋り方もなんとかしろ！」

「あーだこーだと五月蠅い奴だ」

「集まれと、ご丁寧に皆の所を回ってたんだ。全部知っての事なんだろうが！」

「知らん」

「へ？」

あっさりと返答され、亮介だけでなく惣太郎と達也も同時に顔を動かした。

「知らんて・・・おい、あれが知らんって言う奴の態度か!？」

「君に私の態度を責められる謂れなどない。今も言ったが、これが私の性分だな」

心の底から本当にそう思っている恭輔は、不愉快だとばかりに眉間を寄せ亮介を睨みつけた。

「性格は変わってませんね」

涼しげな笑みを浮かべ、一人立ったまま一同を見下ろす姿にある日の面影を重ねる。

「君もな」

向けられた微笑に、志の完遂を遂げられず、人生半ばで生を終えなければならなかった悲哀は感じられない。目に映るのは、命を懸けて生き抜いた人の生を再び送れる、という喜びに満ちた様相を呈した男の顔だ。

三人のやり取りに関心を示せない者が一人、恭輔の左に座している夏月に神経を集中させていた。

(この人、誰?)

気を探っても心当たりとなる人物が思い浮かばない。ここに集まった者の中で、独りだけ異質な感覚が、葵を苛立たせている。

「どした？」

落ち着きのない気を横で放たれては、駿も目の前の話しに集中が出来ない。

「あのさ」

小声で話しをしようとした葵に、亮介が人さし指を突き出した。

「大体、あいつらと一緒にというのが気に食わん!」

「それはこっちの台詞だ、くそ力ギ」

「ガキだああ!？」

「やるか!？」

駿が片足を立てたものだから、亮介も受けて立つとばかりに腰を上げる。

「やめなよ、駿」

「てめえは黙つてろ！」

「挑発に乗る方もガキじゃん」

「なんだとお！？」

「それより、葛木さん。さっきからずっと気になってるんですけど、その人、誰ですか？」

怒りの矛先が向けられても一向に気にせず、苛立つ相手が誰なのかと葵は問いかけた。

「私？」

葵の視線を受け、今度は自分を指差している夏月に皆の注目が集まる。

「そう言えば、君だけわからないな」

惣太郎が感じている気は、一人を除いてどれも懐かしい響きを鳴らしている。だが、恭輔の側でじつと沈黙を続けて座る女性から感じる気には懐かしさを感じない。それを葵も感じているのだ。

「集められたのが同じ刻を生きた者であるとは限らぬ。彼女は・・・そう、我らよりもまだずっと以前にこの世に在った者だ」

「腑に落ちない」

なにがだと、駿が葵の顔を横から覗きこんだ。

「ここに居るのはどう見ても、元治から慶応の動乱に生きた者。それも時の人、と今では呼ばれる人間ばかり。その中でたった一人、違うというのはおかしくないですか？　そもそも、なぜ幕末を知る者だけなんです？　戦国武将でもいい訳でしょ？　ううん。侍じゃなくてもいいはずですよ」

「それを私に問われても困る。だが、一つの仮説ならば立てる事ができる」

「仮説？」

「神々の世から平成に至る今日まで、歴史の中で世界が最も変転した時代が、幕末と呼ばれる刻だ。強き者が知略を巡らせ武力に頼った天下統一は、いわば領主の欲が生み出しものに過ぎん。日本の為と成した戦ではない戦国の世とは異なり、志士と呼ばれる多くの革

命者を生み出したあの時代は、手法は問わずとして、外敵からこの国を守る為の戦が根底にある。外敵から国を守る点に付いては、幕府もそうであった。今再び、この国は脅威にさらされようとしている。つまり、国を守る、という点だけに集約すれば、戦国武将よりも幕末を生きた我らの方が理に適うのではないか、そう考えた」

「戦国の世にも、穎悟を以って国を守ろうとした武将がいる」
「戦国は乱世、幕末は動乱の時代だ。類が違う」

違うと言われても、亮介にははつきりこう違うと言い返す事が出来ない。

安土桃山時代、慶長5年に美濃国不破郡関ヶ原（現在の岐阜県不破郡）で起きた”関が原の戦い”で、敗退した西軍の総大将に就いていた毛利輝元に対し、東軍総大将である徳川家康は「本領安堵」の約束を反故し、百三十万石から三十六万石余りに減封した。

幕府に対する遺恨は、この時より江戸時代末期に至るまで長州人の心の奥底に強く根付く事になり、やがて「倒幕」という形で抑圧された感情が爆発した。

朔月亮介の魂は、現在の山口県が長州（長門国）であったこの頃に、雷光石火の如く倒幕へと自国を赴かせた高杉晋作と言う志士のものである。

「だが今回の相手は、人の使う武器火器では太刀打ちできぬ。剣の技を磨き、刀に志を託し、欲を捨て、志を一つとした者が選ばれたのだ」

「その人は・・・」

顔を顰め考えに耽っていた葵、達也、惣太郎が同時にそう声を発した。

「あなたの言うところの志士ではなく、人の使わない力を持つ者。そう言うことですか？」

「いかにも」

あっさりと肯定した恭輔は、ニコリと夏月に微笑んだ。

「彼女は陰陽師だ」

「へ？」

また亮介が面食らった顔で、気の抜けた声を上げた。

「陰陽師？ あの吉凶を占うあれか？」

「強ち間違いではない。が、世に伝わる陰陽師とは異なる存在だ」

「ええっと、式神つてのを使っんですよね」

興味津々と京子が身を乗り出してくる。

「吉凶の占いも然りだが、彼女は九字を使い、魔を抜い、式神を召還し、魔封じを行なう」

「へえ」

今度は感嘆の声色だ。

「彼女が、安倍晴明殿か？」

「いや。晴明殿の末裔、藤村右京と言う」

そこに居る誰もが、聞いた事のない名前に首を傾げる。

陰陽師、と言って出る名前は、安倍晴明その人だ。その他に名高い者を思い出すことができぬほど、晴明の偉業は平成となっても多くの書物で語られている。

「小さな村に住んでましたし、吉凶占いや祈祷がおもな生業でしたので、書物に残るほどではありません」

「しかし、それ相応の実力をお持ちに成っておられるのでは？」

退屈だと言わんばかりに、先ほどから欠伸をかいている真人を押しつけ、達也が膝を前へと出してきた。

「これといった事は特に・・・」

「待ちたまえ。まだ天命が下っただけだ。ああ、二人を除いてだが」その視線が真人から葵へと移る。

「まだ刻は十分に満ちてはおらぬ。月が満ちていくのと同じく、いずれ事の由は判ってくる。まずは、晴明殿の話しを最後まで聞きたまえ」

「するとなにか？ さっきのちっこい奴が安倍晴明なのか！？」

「ちっこいとは何事だ。あの方はあえて成長を止めているに過ぎん。身体の成長のせいではない」

「それ、嫌味だろ！」

「嫌味ですか!？」

馬鹿、という小さな声が惣太郎と泰助の口から漏れる。

「おまえ達の背が低かったとは言っておらんだろっ」

「うっ・・・」

「おまえのせいだ！」

「ちよっと！　なんで私のせいなんですか！」

「いい加減にしたまえ」

うんざりだため息をついて、苦笑を浮かべる夏月の横へと腰を下した恭輔は、後ろに感じる気配を探る。

（どれほどの刻を使い、己の力を使い続けているのか）

生身の体力は少年のそれと同じく無いに等しいだろう。無理を推して力を使い続けるには、身体にかかる負担は尋常なものではないはずだ。

（天がそれを見越し、この者に命を下したとしか考えつかぬな）

実の所、恭輔にも陰陽師の魂を宿している者が一人だけという理由がわからない。自ら立てた仮説が正しいという根拠もない。

「何をさせたいか、か」

「鬼妖の存在を考えるなら、その退治を俺達にさせたいと言っところだろう」

「しかないのう」

「鬼退治か」

まだそうだと決まったわけではないのに、亮介の顔は嬉々として
いる。

「桃太郎になるってことかぁ。面白いね」

正座で痺れた足を摩りながら、京子は首を傾げて泰助に同意を求め
める。

「っ！」

「どしたの、泰助」

「なんでもない！　くそっ。なんでお前が」

泰助は後の言葉を飲み込んで顔を背けた。

「まだ言うか」

耳をひっぱられ、もう少しで京子の膝の上に倒れそうになった泰助は、片手を疊に着くと怒った眼差して京子を睨んだ。

「すべてが判るのには、まだ時間がかかりそうやき」

「土佐弁になってるぞ」

「面どくさいから、もうどつちでもええ」

胡坐をかいた膝の上で頼杖をつく真人は、ほんとうにめんどくさそうだった。

「その鬼退治に、私達と陰陽師さんが必要なんだ」

「鬼妖については清明殿が後ほど語ってくれよう。日は長く話しもまた長くなるう。腹ごしらえをしておくか」

そう皆を見回し、腹ごしらえと聞いて喜んだ真人に呆れながら、

恭輔は食事の用意をさせると部屋を出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2174r/>

平成奇譚 『刀使師 卯月の舞』

2011年9月16日03時15分発行